

地域の自然環境を活用した保育実践について

— 非認知的能力を視点として —

Child Care in Local Natural Environments

— A Case Study Based on Non-cognitive Capacity —

次世代教育学部こども発達学科

藪田 弘美

YABUTA, Hiromi

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：自然体験活動，非認知的能力，保育環境，保育所保育指針

Abstract：In recent years, the society surrounding children has been more and more lacking in time, space, and companionship for them to live and play as children should. In addition, a declining birthrate, the trend toward the nuclear family, deficit of experiences, and poor community education have caused deterioration of children's communication ability, physical strength, and norm consciousness. What education needs to do now is said to be to nurture children's capacity to live in this rapidly changing society. For that purpose, it's indicated that non-cognitive capacity needs to be developed. This point is highlighted in the revised Guideline for Nursery Care at Day Nurseries announced in March, 2017 and to be enforced in April, 2018. The importance of experiences in nature for development of non-cognitive capacity has also been argued in many preceding researches.

This case study of a nursery school conducting a nature experience program shows how the children have grown after the nature experience activity from a perspective of non-cognitive capacity. Specifically speaking, it became clear that they could get excited and interested in nature, take on challenges, and develop themselves. Also in daily life, they learned to be actively involved in their circumstances, share the joy, the place and the image, and create and develop their plays. In particular, the children 4 or 5 years old became more and more cooperative and explorative, and learned to compromise. They built up their foundation (motivation) for independence and demonstrated good moral behaviors.

Keywords：nature experience activities, non-cognitive capacity, nursery care environment, Guideline for Nursery Care at Day Nurseries

I. 研究の背景と目的

本研究では、幼児が自然体験活動を行うことで、問題解決能力，探求心，主体性，興味・関心，忍耐力，人と関わる力などの非認知的能力がどのように変化したかを明らかにすることを目的とする。

汐見（2017）は、「非認知的能力とは、簡単に言うと数値では表せない能力，外から見えにくい心のスキ

ルのことである。記憶できるとか，知識を正確に理解するとか読み書きができるなどの外から見えやすい認知的能力に対して，探究心，創造力，思考力，判断力，粘り強さ，忍耐力，勤勉性，真面目さ，チャレンジ精神，思いやり，などの計測できない能力のことである」と述べている。

本研究で非認知的能力に着目した理由は，2017年3月告示の保育所保育指針（2018年4月施行）にある。

今回の改定のポイントに3つの柱からなる「資質・能力」を育むことという記述がある。3つの柱は具体的に下記の通りである。1.「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、2.「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、3.「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の育成）」である。そして、この3つの柱が、5領域の「ねらい」の柱となっている。「ねらい」は、以下の3つの順に記述されている。1.「知識及び技能の基礎」（豊かな体験を通じて、感じたり、気づいたり、分かったり、できるようになったりすること）、2.「思考力、判断力、表現力等の基礎」（気づいたことや、できるようになったことを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすること）、3.「学びに向かう力、人間性等」（心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとすること）、つまり、非認知的能力の育成の重要性が示されているからである（無藤隆・汐見稔幸・砂上史子、2017）。

これまでの先行研究では、非認知的能力は自然体験活動の中から育まれることが多いと述べられている。山本（2005）は、幼児期に豊富な自然体験活動を経験した卒園児は、安定した情緒の中で、自己主張や自己抑制、他者への思いやりなど、人と関わる力を身に付けている。また、粘り強さ、気概、忍耐力等の非認知的能力が高いことなど、行動や発育、発達に影響を与えていることを明らかにし、井上（2009）は、環境と人の関わりを深めるためには、幼児からの自然体験の積み重ねが重要だと述べている。また、岡本（2010）は、秋田県の「森の保育園」の事例をもとに、幼稚園教育要領の領域「人間関係」「環境」を視点とし分析、考察をし、幼児にとっての自然体験の重要性を述べている。

国立青少年教育振興機構が2014年7月に公開した「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」によれば、子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、意欲・関心が高かったり、最終学歴が高かったりする傾向が見られるという結果が出ている。特に、自然体験に関しては、子どもの頃に自然体験が豊富な大人ほど、現在の意欲・関心が高いという結果が示されている。

行政の視点は、2014年9月、鳥取県では、保育所、幼稚園等の保育施設等における定期的な園外での自然体験活動を支援することにより、子ども達が自然に触

れる機会を増やし、鳥取県の特徴の一つである「豊かな自然」を活かした子育て環境の充実を図ることを目的として「自然に学び、遊びきれ、とりっこ事業」という補助金の交付制度を創設した。

また、2015年4月に、鳥取県の恵まれた自然のフィールドを活用して保育を行う園を「自然保育を行う園」として認証し、それに基づき運営費の補助を行う「とっとり森・里山等自然保育認証制度」を創設した。

このように行政が、子どもにとって幼児期からの様々な自然体験活動を通じた育ちや学びが重要であることを認識している。つまり、自然だけあっても子どもたちの育ちは保障できないが、資金援助があつてこそ教育としての自然体験が位置付けられると考える。

そこで、本研究では、教育として自然体験が位置付けられている鳥取県の公立保育園での自然体験活動の場面をとらえ、どのような子どもたちの姿があるか、非認知的能力の定義をもとに分析、考察し、実践的に明らかにする。

Ⅱ. 研究の方法

（1）調査対象と期間

鳥取県三朝町立竹田保育園（以下本園とする）の全園児（0歳児～5歳児）の自然体験活動の様子を、2016年4月から2017年3月までデジタルカメラで記録した。今回の調査で全園児を対象にした理由としては、調査対象園の園児数が20名程度の小規模園であることから常に全園児での活動が主となっているからである。また、上述した先行研究で幼児期の自然体験の重要性が確認でき、それにあたっては、地域の自然が豊富な本園がフィールドとして合致していると考えられるので研究の場として取り組んだ。

（2）観察方法

観察方法としては参与観察法を用いる。子どもたちの姿、地域の実態を把握したうえで、本園が構築したプログラムを地域の方、保育者、保護者、ゲストティーチャーと共に展開した。その中で子どものつぶやき、行動、表情をカメラで観察・記録した。これらの子どもの姿から、エピソード法により多様な側面について分析、考察を行った。また、子ども全体のつぶやきや行動をカメラで記録することは難しかったため、他の保育者に活動時の子どもの様子を聞くことで補填した。

子どものつぶやきについては、鳥取県教育委員会事務局小中学校課（2014）『鳥取県幼保小連携カリキュラム「遊びきる子ども」をめざして』に照らし合わせて、実践の意義を明らかにする。また、実践記録場面では、非認知的能力の定義のもとに分析を行った。

Ⅲ. 結果と考察

本園の、保育・教育方針の一つとして、様々な自然体験活動を通して、豊かな感性を育み、創造性や思考力を培う。また、人との関わりの中で思いやりの心を育て、自主自立、協調の態度を養うと掲げている。上述したことにより、年間を通して、ほぼ毎日、雨の日も合羽を着用し往復3～5kmの自然散策をし、何らかの形で自然体験活動を行っている。

本事例は、その中でも非認知的能力が顕著な活動を論じることとする。

事例1（大きくなったタケノコを採ろう）

地域を知る手法の一つとして自然散策を行っている。子どもたちの手でお散歩マップを作成して、毎日、子どもたちが行先を決めている。久しぶりに穴鴨神社（本園から、子どもの足で10分程度歩いたところ）に行こうという子どもたちの声からみんなで出かけた。境内のブロック塀の上り下りを楽しんでいた時、山の方を見て、大きく伸びたタケノコを発見する。神社から裏の山に移動が始まる。自分たちの背丈の2倍以上のタケノコに驚きながらも、採ることを決断、挑戦する。手で押したり、足で蹴ったりする。次々に友だちも参加しタケノコ採りが始まった。（図1-1）タケノコの大・小によって採り方を変えていくことに気がつき、伝え合っていた。（表1）どんなに高くなっているタケノコでも力を合わせれば倒すことができることに気づき、達成感を味わっていた。（図1-2）園に帰ると、タケノコの長さに興味を持った子どもたちは、園庭にタケノコを寝かせて、何人寝ころべばタケノコと同じ長さになるのかを確かめていた。

汐見（1993）は、何かを知る時に、確かに何か分かったとか、自分は今確かに知的体験をしているという実感が伴う知の手応えを感じることが大切で、日常生活における自然体験の重要性を述べている。この体験は、子どもたちが自ら発見し、興味・関心を持ち、仮説を立て、友だちと相談しながら試してみたり検証したりし、学びに繋げるといった、まさに、実感を

伴った知の手応えを感じる体験、つまり、探求心、思考力が育まれたと考えられる。



図1-1 なかなか折れないな～



図1-2 皆で力を合わせて持って帰ろう

表1 タケノコ採りの子どものつぶやき

【】は、めざす姿の10の視点より抜粋		
記録日：5月29日	天候：晴れ	対象：4、5歳児
(大きなタケノコを見つけてかけよっていく。)		
5 S：「お～い、タケノコの大きいがあるよ」	【発見】	
4 K：「どこどこ？あっ、ほくも見つけたよ」	【共有】	
5 S：「なあ～一緒にとろうや」	【共同】	
(あまりに大きなタケノコに、どう採っていいのかわからず戸惑う。)		
5 O：「どうやってとろうか、そっちを押してみて、そう そう」	【協力・試行錯誤】	
5 S：「こっち側に押すと採れるかもよ」	【提案・協力】	
4 N：「揺れるけ～あと少しだわ」	【気づき】	
(押す方向を分担して、皆で力を合わせる。)		
4 N：「ほらな～とれたがん、やった～」	【達成感・満足感】	

事例2（川辺の生き物さがし）

本園に隣接した天神川で、川の中に生息する生き物さがしをする。天神川の魚を守る会の会長（元北栄町立北条小学校長 中前雄一郎氏）を講師に依頼する。川の中の魚を捕まえるには、D型のタモ、金魚用の網が必要とのことで個々に購入する。当日は、残暑が厳しく水遊びに最適の気温だった。河原で初めに中前氏が川に入って魚を採り、魚を見ながら名前を聞いたり約束事を聞いたりする。採った魚を素手で触ると魚が火傷をするので、必ずタモから網に移し替えながら観察ケースに入れることを教えてもらう。その後、川へ入って行く。7月にも魚つかみで川に入っていたので躊躇なく入ることができた。子どもたちが大きな石の辺りにタモを置くと、中前氏が石を動かす。すると魚がタモの中に入ってくるという仕掛けだった。タモの中に魚が入るたびに大歓声の子どもたちだった。（図2-1）。年長児の姿を見ていた他の子どもたちも「ほくも」「私も捕りたい」と言って、中前氏の手を引いて魚捕りを手伝ってもらっていた。最終的には、全員が何らかの魚を捕ることができた。（表2）。捕まえた魚の名前を教えてもらったり、観察したりする。捕まえた魚は、「元気で、また帰ってきてね」と言って川に返す。（図2-2）中前氏は、「今日捕まえた魚は鳥取県でも、なかなか見られなくなった魚だった。川がとても綺麗ということだよ。みんなは、すごいところに住んでいるんだよ。お家の人にも教えてあげて」と話した。天神川の流れる竹田地域は少子化、高齢化が先んじて進んでいる中山間地域ではあるが、ここで育つ子どもたちを、地域の方々がしっかりと包み込んで、様々な教育の場で関わり合いを持っている。

上述したように地域力で子どもたちのコミュニケーション力を強め、人間力を高めている。自然環境だけ素晴らしくても、人との関わり合いが薄ければ、地域を流れる川も単なる水の流れに過ぎないと考える。子どもたちは、この活動を通して、魚等の生き物を見たり、追いかけたり、採取したりする中で、水中や水辺には色々な生き物がいること、食べ物や生息場所、生き物の行動など、生き物の多様に生きる有様に関する知識が得られた。そして、園に帰り魚の食べ物、どれくらい大きくなるのかを図鑑で調べて理解を深めている姿もあり、この姿は小学校低学年の自覚的学びに繋がっていくと考えられる。また、自分の手で捕まえたという意欲、試行錯誤しながら捕まえたという達成感が味わえたと考えられる。



図2-1 タモを押さえて石の下の魚を捕まえる



図2-2 タカハヤを川に返す4歳児

表2 魚を捕まえる時の子どものつぶやき

【】は、めざす姿の10の視点より抜粋		
記録日：9月12日	天候：晴れ	対象：1, 2, 3, 4, 5歳児
4 N：「早く捕まえないな～」	【意欲】	
4 A：「なかなかおらん～」	【残念】	
4 K：「そっちじゃないの？」	【提案】	
5 S：「Nちゃん、こうやるだあよ。一緒にやってみよう」	【思いやり】	
中前氏：「上手上手、その調子で」	【励まし】	
(N児が構えているタモの傍の大きな石を漁師のおっちゃんが動かす。)		
4 N：「わ～魚が入った。やったあ～」	【満足感】	
中前氏：「捕れた捕れた良かったな、これは、カジカっていう魚だよ」	【共感】	
4 N：「わ～魚が入った。やったあ～」	【満足感】	
2 R：「これがカジカっていうか？」	【興味】	
(ほぼ全員が何かの生き物を捕まえるが、最後には「元気で、また帰ってきてね」と言って捕まえた魚を川に帰す。)		

事例3（新しい道見つけた）

1週間前から降り続けている雪が積雪になり、あたり一面真っ白で、山の木々も見えなくなっていた。子どもたちは、日頃遊んでいる裏山はどうなっているのかという疑問から裏山に散策に出かけることにした。裏山は積雪で、草や木がつぶれた状態になっていた。（夏は、草や木が生い茂っていて足を踏み入れることができない状態である。）子どもたちは、雪を踏みながら進んでいった。すると上の方にダムが見えた。ここを行くとダムに繋がるのではないかと考えた子どもたちは、興味津々で、どんどん進んでいった。子どもたちは、夏は木が生い茂っていて通れなかった山道も、雪山では雪の重みで草や木が押しつぶされて通れること、つまり四季の自然の違いに気づいていた。また、雪道に慣れておらず思うように歩けないで泣いてしまう2, 3歳児の子どもの姿があった。それを見ていた4, 5歳児は、保育士に助けを求めるのではなく、自分たちで2, 3歳児の手を引いてあげたり、通りやすくしてあげたりしていた。（図3-1）（図3-2）自分たちの力で、問題を解決していく姿が見られた。（表3）苦労しながらダムの頂上にたどり着いた時には、「やったあ」という歓声が聞かれた。とともに、4, 5歳児は、2, 3歳児の子どもたちに「よく頑張ったね」という言葉をかけていた。

ルソー（1762）は、どんな環境においても悪いことに耐えることを学ばせる、他人のものさしではなく自分のものさしで判断する判断力を養わせることが教育で大切であると述べている。この雪道での自然散策は、単に五感を使って豊かな感性を養うだけではなく、雪道の中では、冷たさを感じたり、思うように歩けなかったりなど、自然の厳しさを経験し、忍耐も必要となった。そして、その中では、どのように対処していくかという判断力も必要となった。子どもは、何度も転んで痛い、冷たい思いをしながらも、それでもやめない、諦めない。子どもは、いつでも自分の限界に挑戦し、そして、様々なことを獲得している存在であると考え。その中で、それが他者への理解、悲しみ、辛さ、痛みを知り、思いやりに繋がったと考える。また、4, 5歳児からは自分たちの力で山道を制覇できたという満足感、自信へと繋がったと考えられる。

それは、2, 3歳児の子どもたちに「よく頑張ったね」と誇らしげに言葉をかけている様子から伺うことができた。次の活動の意欲に繋げてほしいと考える。



図3-1 2歳児の手を持つ4歳児



図3-2 通りやすいように木を押さえる4歳児

表3 雪の山道での子どものつづやき

【 】は、めざす姿の10の視点より抜粋		
記録日：2月5日	天候：曇	対象：2, 3, 4, 5歳児
(雪で草や木が押しつぶされた山へ入って行く。)		
4 N a：「雪で滑って登れんわ～」	【気づき】	
5 O：「ぼく、怖いけ～ゆっくりいくな」	【思い・挑戦】	
2 Y：「ここを登ったらいいかな？」	【試行錯誤】	
5 S：「うん、ここが簡単だけ、そうそう、そこを持ってな」	【教示・思いやり】	
2 Y：「ありがとう」	【感謝】	
(雪があり、草や木が生い茂っているので歩きにくそうだった。)		
4 N a：「Yちゃん、私についてきて」	【誘導】	
4 F：「ぼくが木を押さえてあげるから大丈夫。」	【思いやり】	
3 Y：「ここから行くか～、易しそう」	【挑戦・納得】	

事例4（ありがとうは？）

本園に隣接する田んぼにオタマジャクシを採るために出かけた。田んぼの中で思う存分遊んだ子どもたち、保育者が園に帰ろうと誘うと子どもたちは、座り込んでしまった。その様子を見ていた5歳児が、近道で帰ることを提案する。しかしながら、近道には大きな用水路がある。用水路にさしかかった時、5歳児が「Hちゃん、小さいから渡れないよね」と言い出し、相談が始まった。そして、5歳児の一人が用水路の中に入り、0歳児の女の子を抱きかかえ、もう一人が用水路の上から引き上げることで、無事にHちゃんは渡ることができた。（図4-1）（表4）その時、5歳児が「Hちゃん、ありがとうって言うんだよ」と言うと、Hちゃんは、満面の笑みを浮かべて、「あーがと」と言った。その数日後、園庭で泣いている4歳児を見てHちゃんは、下記の行動をした。部屋から1枚のティッシュペーパーを取り、おぼつかない足取りで4歳児のN君の傍に行き、Nちゃんの涙をティッシュペーパーで拭きながら、「あーがとは？」と言った。その言葉を聞き、N君も泣き止み「ありがとう」と言っていた。（図4-2）

この事例で特筆すべき点は、2点あげられる。1点目は、事例3同様、困難に遭遇した時、保育者に助けを求めるのではなく、どうしたらHちゃんを渡らせることができるのかを子ども同士で話し合いながら方策を見つけていた。つまり、問題解決能力が育っていた。2点目は、0歳児のHちゃんは、用水路で渡れないで困っていた時に助けてもらったこと。また、そういう時には、「ありがとう」という言葉を発するということを確認し、人が困った時には、どうすべきかを修得したと考えられる。そして、日常生活の中でフィードバックできており、思いやりの気持ちで4歳児に関わることができ、「あーがとは？」という言葉が発したのだと考えられる。2017年3月告示の保育所保育指針（2018年4月施行）の大きな改定のポイントとして、乳児保育、3歳未満児保育の充実が掲げられている。汐見（2017）は、その理由を「世界的に非認知的能力の育成の大事さが認められてきており、その基本がこの時期に育つことが理解されてきている」と述べられている。つまり、非認知的能力の育成は0～2歳がベースになると考えられる。この事例では、5歳児から受けた温かい受容的な対応が、即、本児の思いやり行動に繋げていくことができていた。0歳児から非認知的能力が育っていると考えられる。



図4-1 0歳児を抱っこする5歳児



図4-2 4歳児の涙を拭く0歳児

表4 用水路での子どものつぶやき

【】は、めざす姿の10の視点より抜粋		
記録日：6月2日	天候：曇	対象：0～5歳児
(帰り道、用水路にさしかかった時。)		
5O：「Hちゃん、小さいから渡れないよね」	【気づき】	
5F：「ぼくが用水路に入って抱っこするから、O君、上から手を引っ張ってくれる？」	【提案】	
5O：「うん、わかった」	【了解】	
(5歳児二人が力を合わせて無事、Hちゃんは、用水路を渡ることができた。)		
5F：「Hちゃん、ありがとうって言うんだよ」	【教示】	
(Hちゃんは、満面の笑みを浮かべる。)		
0H：「あーがと」	【感謝】	

IV. 総合考察と今後の課題

自然体験活動を継続的に行っている子どもの姿を非認知的能力の定義をもとに分析し、考察した。その結果、全体的に子どもたちの姿に次のような変容が見られた。

感性が非常に豊かになり、子どもたちの表現活動に

大きな変化が現れた。例えば、山の頂上に登って下界を見下ろすと「未来が見えるよ」など、大好きな川に行くと「このままここに住みたいな」というつぶやきも聞かれた。他にも「今日の雨の音は、いつもと違う。」「雨の降った後は、川の流れが急になっている」「黒い雲が遠くの山に見えるから雨が降って来るよ」「石を太陽に照らしたら色が変わって来る」「雪が解けてきたから、そろそろイモリが沼に出てきてるかも」など、五感が鋭くなり、四季折々に変わる自然の変化は勿論、小さな自然の変化に気づき、今まで気づかなかった自然の有様を、心と身体全体で感じることができるようになった。

そして、自然の中で過ごすことが、心と身体を癒やしてくれることを本能的に知るようになっていた。

また、自然体験活動をする中で、優しさ、思いやり、やる気、自主性、勇気、正義感、判断力、問題解決能力など、子どもたちの心の力が大きく成長し、顔の表情や目の輝きにも変化が現れた。レイチェル・カーソン（1996）が述べているセンス・オブ・ワンダーをよびおこす姿だと考える。

また、子どもたちが主体的に環境に関わるようになったことで、日々の生活の中でも、楽しさ、場、イメージを共有し、遊びを作り出し、発展させるようになった。その中でも、協同性、探究心が育まれ、折り合いを付ける力がついてきた。そして、自立へ向かう基礎（意欲）が培われ、道徳的な行動も見られるようになった。

子どもは環境との相互作用の中で成長するという理論から言えばどうであろうか。やはり、この時期は、地を這うように友だち、大人と遊ぶ体験が重要ではないだろうか。体験という観点から言えば、幼児期は自然物に対する興味・関心も強いことから自然体験は重要である。それは、幼児期は感受性が鋭く、五感によって世界を知る時期だからである。

つまり、幼児期に多様な自然の中で五感を活用して遊んだ原体験があってこそ、体力、思考力、創造力、忍耐力、判断力等の力が育まれ、現代に求められている非認知的能力の向上に繋がることが示された。

ベイリー（1972）も、自然を学ぶということについて、「これは、自然学習は理科ではない。それは知識ではない。それは事実ではない。それは精神（spirit）なのである。それは心のある態度なのである」と述べている。

それは子どもの世界に対する見方に関わるものなのであり、自然体験が子どもの生活を増す喜びで、子ど

もの自然に対する共感的態度を育てるものであると示唆していると考ええる。

自然体験をする中で、子どもたちの心が揺さぶられていることは、上述した実践研究の中で明らかになった。保育にとって自然環境は、子どもの心を揺さぶり、非認知的能力を助長するかけがえのない存在であるといえる。本実践研究を通して、乳幼児期の自然体験活動が非認知的能力を育むことが明らかになった。これからの教育は、できるだけ早くに開始する方が効果があり、費用もかからないと言われている。その教育は、認知的能力を伸ばすだけではなく、非認知的能力を伸ばすことで、後の効果が大きく持続性も長いことが見出されている。

つまり、これからの保育は、非認知的能力を伸ばす自然体験活動を保育の計画に明確に位置付けていく必要があると考える。今後は、2017年3月告示の保育所保育指針（平成30年4月施行）と照らし合わせて、さらに詳しく分析し、他地域でも般化できるモデルを示唆したいと考える。

注

倫理的配慮として、本研究は実践と実態把握を中心に進めることから、個人情報管理においては鳥取大学研究倫理規定を厳守して行った。特に、映像利用に際しては、使用目的を明確に伝え、保護者、地域の方などの許可を得るなど十分な配慮を行った。

本論は、2015年3月、鳥取大学大学院地域学研究所修士課程 地域教育専攻 発達科学分野 修士論文（藪田 弘美）「地域資源を取り入れた中山間地の保育－竹田地域食育・水育・木育プロジェクト活動を通して－」における論考を踏まえ、さらに考察を進めている。

【引用・参考文献】

- 井上美智子（2009）「幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題」『環境教育』（20-1），95-108頁
- Jean-Jacques Rousseau 今野一雄 訳（1762），『エミール（上）』，岩波文庫，28-29頁
- 厚生労働省告示（2017），『保育所保育指針〈平成29年告示〉』，フレーベル館
- 国立青少年教育振興機構（2010），「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」
- [http:// www.niye.go.jp](http://www.niye.go.jp)（2017年8月17日取得）
- 無藤隆・汐見稔幸・砂上史子（2017），『ここがポイン

- ト3 法令ガイドブック－新しい『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の理解のために－』、フレーベル館
- 岡本理子（2010）「幼児期における自然体験の環境教育的意義の一考察－秋田・森の保育園の事例から－」『桜美林論考 自然科学・総合科学研究』（1）、39-48頁
- Rachel Louise Carson 上遠恵子 訳（1996）、『センス・オブ・ワンダー』、新潮社
- Liberty Hyde Bailey 宇佐美寛 邦訳（1972）『自然学習の思想』明治図書、14頁
- 汐見稔幸（1993）、『地球時代の子どもと教育 情報化社会における新しい知性とヒューマニズムを求めて』、ひとなる書房、28頁
- 汐見稔幸（2017）、無藤隆・汐見稔幸・砂上史子、『ここがポイント3 法令ガイドブック－新しい『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の理解のために－』、フレーベル館、76-175頁
- 鳥取県（2014）、「自然に学び、遊びきれ、とりっこ事業補助金」
<http://db.pref.tottori.jp/yosan/H26HojoyokinKoukai01.nsf/d6e669844cf23b634925755c002f7485/4c9957c0e82eb62a49257d4f00012505?OpenDocument>
 （2017年7月8日取得）
- 鳥取県（2015）、「とっとり森・里山等自然保育認証制度」
<http://www.pref.tottori.lg.jp/239563.htm>
 （2017年7月8日取得）
- 山本裕之（2005）「幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』（5）、69-80頁